九月十日菊酒を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中宮亮顕輔家歌合　長承三年九月十二日

題　紅葉　恋

歌人

左

左衛門督雅定

新中納言宗能

右兵衛督経忠

大蔵卿経忠

左宰相中将成道

右

中宮亮顕輔

敦仁道経

前備後守季通

弾正大弼雅頼

兵庫頭仲正

祐祇伯顕仲　　修理権大夫行宗朝臣
丹後守為忠朝臣　　宮内大輔忠季
太皇太后宮大進忠兼　　前肥前守為真
前越後守国能　　弘時
信濃守親隆　　雅親
僧侶賢　　修隆縁
参河　　讃人不知

判者　前左衛門佐基俊

一番　月

左　　左兵衛督

いにしへ八洞庭の月秋をことに照まさるゝ

右　　中宮亮弘綱

秋の月の三五夜を清て清くゝ冴ゆる月の光
左の姿ハ紫式部のかくれ住るとゝ物
哀なる秋とゝ詠ぜしことゝ思ひ合へ
ぬ人ハ世にもあらじ
末代ハ人いそぎ出さて作る所にて詠ぜ
ぬ姿ハ有ぬ歟二方ともに勝ぬ
秋ぞ哀なりとよめる歌ハ雲
須

実ハ滅ぶる物なれハ維摩経ハ喩ハ
ばなれハうくる雲ばかりとこそ
なれ又屋敷ハ大和うたにぬくのこそ作り
作るめる二ハ必煙をそなへる雲とハよめるも
おさ[illegible]ハ作るとさしハお様ハ奇合よめる
[illegible]ハ心[illegible]なる[illegible]
雲とよめる[illegible]ハ煙を[illegible]とよめり富士ハ
ハ[illegible]ハ雑を[illegible]作[illegible]仍笑為指

二番

左

新中納言

あ[illegible]ハ指ひ[illegible]と傾くを思ひ[illegible]秋の月

右

敬信道経

秋ぞ[illegible]天の門渡や[illegible]月の光のさ[illegible]

左右歌首文花義奥等同勝負難知仍為持

三番

左

右左清督

[illegible]秋の例ぞ[illegible]

右

前備後守季通

[illegible]秋ハ[illegible]月の気色や

左右[illegible]等

[illegible]端之奥餘情相似為仍為持

四番

左

岩倉行八千代川乃とやさ潮くみおくれもやる月新

右　　大義門

弾正大弼維順朝臣

なつめもる夏八洲のまあ祓も人の月あとまぬとてあるか

左右歌花實同神名級雅宣降花左方徒多河

情廿月辞右方偏存月思無餘類仍以右為勝

五番

左

あらくさ方ちおくれ天河月ともとまるもるの元

左　　左宰相中将　成通

う曇行あり行雲時乃さをぬる限あり秋の月

左雲ちる梅さ方ちおくれ花といくるとうと紫

いやしくて所合しも竹えくらと左方三十一番典

朝行とかちるくさ和乃竹さ花とか宮とて竹集

以右為勝

六番

左

一　神祇伯

松のくハ智井新ちうかるまて左くるる入て山陽の月

修理権大夫行宗朝臣

右

雲時て夜さえちとうる月新八年ちあまるる秋の雲

尤可与同字頗以昇陋歟又何為不賞今夕停
午之光空可惜明朔寅卯之影哉事義云相遠
蒙既哉右字文体雖似可觀於辞有粗疎
如色毛毛毛毛秋秋秋秋雪雪雪雪若有本文歟
將亦有誤歟歟井蛙智短已迷身緒周正說
没雄雄但右詩制作頗可述之為之間猶若
為勝

七番

尤

丹後守為忠朝臣

右此人あまたまたはとひてまつ今宵中秋月いとけさやと

官内大輔忠季

限こそ月はなけれとまつ秋の夜の月はいとけさやと

右詩文辞委曲折辞義無失端作者之人依然
可觀右歌何忘我朝之艶詞偏授漢家之詩儀
和歌之本意豈可然哉詠曰限こそ月の光は
さとぬるよりとかくれぬるかなと以ての外依
何書文投詩哉依分暉度鶴鏡詠者全非月
本文已為百詠文投歌歌若又依魏鶴之文投詠
者又已乖本文之意情于案文意此二文之外也
別與支歌未聞正說之間推以尤為勝

八番

左

更科の山路にさやる雲なれば月の桂も新のこそ

右

前肥前守為真

左

月の桂も新のこそ

更科の山路にさやる雲なれば

月照れるこそ

月照れるこそ

若山路の暮れはてゝ

月照れるこそ

太皇大后宮大進忠業

九番

左

前越後守國紀

秋の月は雲のいとゝ

右

弘時

天河雲は桂とそしていでぬる月のとゝろ

左

詠月甚少雲辞なる多意趣ひ已處肖

なるに更非俗境之菊又如もまくあるとゝ詠者

もなきはもの四月のとゝろ人のまくあるとゝ

事度両端未知正説耳右可詠似近人耳又叶物

情伝月詠桂影者是詩歌乃本好也仍以若為猪

題意歌右歌天雲はるかなるを雲はるかなるとよめるは
といへるを依歌文于紫之天の川は自然無雲樹者
鵲橋詩は鳥鵲橋とかくまゝ又和歌は雲はるか
なる鵲の橋とつゞけたる橋といへる何まても橋の
やうにはかなくまゝ橋と樹其義不同何や池にも
をは橋といふ此義彼谷にはをとは樹といふ此
はるかのやうにはかなくまゝ不用之字不同なるゆへ雲樹
者歟爾とを不用ゆへ仮名雖相違
はかなくまゝといへるゆへ月はるかなるといふ
はるかなるはるかなるといふ

十番

左

秋の月はるかなるを雲はるかなるとよめるは

右

信濃守親隆

雅親

左歌は浪冷泉院御時の歌合に大弐三位
不審之秀句也于今多左人口文字頗雖相違
大意無遠近之心なれとも名のをの月はるか
なるはるかなるとつゞけたる誠に故心相通事者甚
無あるこゝろをよめる歌合に不頗可避事歟右方は

一首中第二巨病一者蜂腰病之二者鶴膝
病之和歌作式准詩門病之八病云一首中同字
三あるを蜂腰同字四あるを為鶴膝者今于勘
此歌あり字あるもの字三あるも已犯蜂腰鶴
膝也者以巨病也入和歌腰公逃扁篇者雖得登
載尤歌者已舊昔秀歌也右歌者一扁中有二巨病

十一番　　僧堪賢

左　　秋の夜の月とうらいてるあまのはらはるかにこえてる

右　　僧隆源

むらさめのおちおちてをるはすゝかなる秋の夜の月
此左右詞義両□不□詳定

十二番　　藤河

左

底清こうけつをあらそふ色の月はかゝるまてにも

右

春こすはるの月はやまさるふかまさる秋の夜
左のくもりなき月の底清こそいとゆうけもこさらん侍
なと来ふるとてはあるとてはとまさるやうに

笛之伶右方人物共少和かく仕り候ハ
以右為徳

一番　紅葉

左　九條殿

みなの人さんかさしてあとへとや紅葉の色は深くこそ
右　孫猶

山姫よ千とせ共ゆとをゆ而ちるこそといそこそ
以左右方人詞共ふ云所あるとて行きさるも
思ひ寄あわかく仕る様なる成右ハ左人の詠と
も向てもとつくるあること思ひ寄まて今一ハ
名やまさんと思ふ寄まて以右為徳

二番　新中納言

左　九條殿

天波をハとをみちにくしこ家乗ハ遊ましあ共つ梅の花
右　道經

紅葉まつ心花ゆうとをくちにこ家や紅葉ハ色とをもん
左方詞雖撰古質之体義似通幽玄之境右歌
義実雖無曲折言葉已化流也仍以右為徳半

三番

左　右兵衛督

紅乃八しれ共杜ハをみち葉八流さ多ゝを流ハ色ゝ化

左

秋乃色とんく清庭へをまつ八とみちの移□

左歌詞雖非秀逸義存□尋古可感興

雖類宋生潘良之思辞希古質徒作億郎方

探之風事非義仍以左為勝

四番

左　大義卿

嵐吹て木末の山のとみちの葉八叶ぬの色ことこそ

左　維順

秋ふる朝夕毎に色ふる山八桂の下葉とみちしく色

左歌詞かしくさへ侍なとは詞ことに

やしく侍なくるひなに年へぬる□

乃朝ぬてふ古にさそはれぬ

やうみをおもふ太宗朝夕毎ことにふるさと

白雪小叶毎小いくとふる山八下葉小と紅葉

しにけりといふ云にいくとなくひさりとも

見えぬとへくとも下葉とそ見ぬくよりさそ

ふるおちんと侍に紅葉とかへてまつ桂とおと

立て桂乃下に落ちくるれるとせんと橘葉

推付葉乃とみちとくるぬるとろ形

紅葉せさせんとハおもひよりるに作らんさしハ毎
海ハるるくさへまとふ赤木の紅葉とまさるとこ
へくや作らん

五番

左　一　宰相中將

をしたへて紅葉はなをよ成よりの時毎に深ぬ樹をまとハ

右　仲正

ときわたるハ紅葉あしにてくらまとてとのとめ難さ称歌を
たつの時毎に深ぬとみち紫右衛門よりけり
まとそらんときわち紫ちハまさらてや作らん

六番

左　伯

あはまゆくいさ〳〵小河よりみち紫はなを接つる

右　行宗朝臣

時毎をそ二よりしをとん波とハ樹をめけふ深く〳〵をるる

左方詞花言葉可見右製依已迂誕首尾分
妓艶仍以左為勝

七番

左　一　為忠朝臣

歌入の時毎ゆ出て深つるんかくまとるよ赤のもの杜

右

秋されハ小倉の山も若ゝしく下照紅葉もて所いくさかとなるらん 庵紅葉といへるまて

いひかゝるかきのもとに少ゆかしとに次句共歌枯の事を

法ゆくらゝ生へと庵紅葉といへるかゝの岳とうの

あしさにを伝ふ 右所小倉山より下てる紅葉と

をの行るゝや流水謹文さうまかりくゝ

をへ也 右所をゝ句ふ也 此歌をゝ毎と

紅葉四右所をゝ紅葉かりをゝ仍為

八番

左

散ぬへき小時の秋の紅葉をゝ時雨ふる奥の海波

右

為恭

山城の宮の山へ紅葉を人ハ見る

左所詞歌頗似有新小鴻歌ハ紅葉ありとゝ

説所作ゝ也但所をゝ宮川落やをゝ

宮川をゝ海人乃袖をゝくハ紅葉ゝ

若依付所文者彼詞頗□作仍歌者非可相事

也右山を伝のをゝ山辺の紅葉をゝ

をゝ人ハをゝ山城を山を海を山を

昔よりふるといひて侍ける事とそ今
ゝうて侍るを詩歌にはさしはゝるの
なまはゝうのうをはくつゝたなのくるゝ
ゝとなんゝて侍る古今にをしまう極り
ゝみちとゝうるふるもんゝ侍ゝと相撲やゝと
漢詩ゝて侍る又なまはゝうゝゝちゝる
ゝもゝとゝゝ侍ゝくゝゝゝて侍ゝて
はゝ左方辞義共劣仍為持

九番

左　國紅

ゝゝゝ紅葉ゝ多の源ゝ遠ゝ相ゝ所ゝゝ引ゝ引ゝ引ゝ

右　成時

時雨ゝゝゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

左方詞義共劣歌花ゝ就中辛章ゝ

ゝゝ辞ゝ有ゝ□故人有言人文之懲ゝ可

恐ゝ右方辞ゝ比興之辞義ゝ可採ゝ義ゝ

中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ仍為持

十番

左　親隆

三稙ゝゝ秋のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右　　雅親

霧露やよそにもらさん神無月紅葉は杜の名月にぞ
左歌たと名高き紀のみちもとむるところぞ三輪の
山かの杉をもる門のやうに透て見えん紅葉を
秋のあはれしられんとおもしろき侍るとは申しくぞ
思ひ侍る右歌ことに霧は大かたの羽よいふ
侍るをしたがひいもを其事にいふとをまかりくぞ
見えんたくるこの二首大略雖同科右ハ今少
文字つかひあまりやられその事は以右為勝

十一番

左　　琳賢

初日山てる紅葉を吹きては松の緑もうつろひにけり

右　　隆縁

胡霧晴るる紅葉の色見えてかつ紅葉みちてさぞ
左歌の胡日山はそこちてる紅葉にあかす松之
うつろひぬへきやうにみゆるうつろふさまよき侍るハ雅
三夜月の林の下紅葉や秋のかの紀籬の叢なきを
ふる讀きへしいそのそをせ誠紅葉のまことなれ
をさちれ名にあまりてうつろひさへさ侍らん
以右加山水只紅葉とのみ題を読くまかり候ぞ

同のおもへくみとりさかへる松の西ふ於くるとそ見ん
備て侍る哉右歌は山ふまかけふ紅葉のちらさるて侍る
歌を同し紅葉を見る作りあへ遣右歌錦なき袖を
よせたるん吟侍りしも又まゆく紅のふかくてそ見しと
以為かうのいゆるこそ様庭紅とをみてと詠
我身様をみるところを覚え侍る此事いとおほえ
まさりく侍るやうもおもひのさま事に侍るとみえ
雨をは花のかたちに書付たる侍れは中にかん哉二首
をさためかたく侍るめる事にこそ侍るめる是ハさらに
持為とそ申侍るめる

十二番

左　　参河

紅葉葉の此秋乃色もみち葉ハ時雨山に出て染るなるらむ

右

柞原ゆくへさ道ハたえまかゝる散紅葉乃ふきまよひしを

左哥無誉緒存一興歟右哥詞滞義迷風躰

若旧仍以左為勝

一番

左　　恋

左衛門督

染かへし涙の袖ハあかすとも逢て恋しき人にみせはや

右

[illegible]

左今の辞義花弱 [illegible] 深心近軍可謂謂秀逸乎左方

辞已有不調義又有所□仍以左為勝乎

二番

左　新中納言

我[illegible]

右　道經

[illegible]

左右歌首文花義實共無等級仍為持

三番

左　右大臣清輔

[illegible]

右　季通朝臣

[illegible]

左方清輔朝臣

[illegible]

左方の辞花可以弱義實可以憐而已右方の詠

色之深淺可論憂愁之勝劣歟心□尚花の勝乎

四番

左　大納言

[illegible]

右　　　　　　　　　　　　　維順

おく山の谷の埋木人しれすこゝろにふかむる名をそ惜き

左哥詞渉妖艶冨風流就中論其氣味
只詠之右哥初句雖学英祐之祷卒章已旧
歌也其歌云うもれ木のしたにありてふ神さひにけりとも
恋にくちはてん名をそをしきと詠以左為勝

五番

左　　　　　　　　　　宰相中将

なみたをハしるへと独ね恋しき我袖のみやかしおもふあまりに

右　　　　　　　　　　仲正

今ハさハいくたひましに恋しとハ清くしきえしはかなきものを

左右二首言花ハ實以同科也指南雖異仍為持

六番

左　　　　　　　　伯

袖のうらに海人のそてなハるとて干しはてしとかくれぬる哉

右　　　　　　　　行宗朝臣

思ひ妻おきゆく船の早舟のよそへてなこそ人ハこひしき

左哥文神雖不驚耳目首尾以存恋心矣右哥
恋心已異只言明利矣詠物理足以可称
仍以左為勝

七番

左

住吉のまつのたかさを我みしより幾年ふりぬ

為忠朝臣

右

忠季

逢事をまちかねてまつ松浦川七瀬の淀みよとゝいかなる

左歌一篇雖存風情但まつさき七文字頗近俗也右

歌にも松浦河七瀬の淀をよとゝいかなる事をかいへる詞

聊庶幾門八十瀬ともよめり七瀬とよめるハさもあるにや

八番

左

忠兼

あまてらすかみのめくみハ君にこそあまねかりけり我のみ

右

為業

わすれなく思ひいつるかな

左歌よろしからず右歌は詞なと宜也

九番

左

國能

祈自由何為持歌

節之作右方已存誹諧之躰也

五十八

ちの事をいはんもそらぬ我意をたてしの名共理ま

右　　弘時

遠事共をたてしをたてしを路まハ入ち海ちゝ物ゝ

九条一篇有業理首尾叶ちゝ法ちゝちゝ

いへふちゝ詞滞てゆゝ仍仏為勝

十番

左　　親隆

思ふ事をこハいちちゝ宗ちゝ河ちゝ共神業泊を

右　　雅親

意をおて歌ち歌のおちゝハちゝ共ちゝぬちゝるほ

九条の後陸自宗也隅数流右方辞格古風頗

有遠興但ちゝこの歌ちゝ詞ちゝ

方ハ見ゆ人ちゝ仏ちゝ物ちゝ

人ちゝちゝ夢ちゝ

ちゝこ文ちゝ仏ちゝ信太ちゝ葛葉

多枝ハ物ハちゝ文殊ちゝ

なちゝ仏ちゝ仏ちゝ

事いまちゝ弟毛詩ちゝ文ちゝ

ちゝ物ちゝ仏ちゝ

ちゝまちゝ文選ちゝ手箱ちゝ

作り給し□ふるぬくてはたらきをつ
くりて書くるをいとへて作る事は作る
人をとりたんをひろめをとまる道をこそ
見るの外おのおの作るを無量無尽
ものめ共たるの八宗ハ作道ハ仏法為勝地
らふをめ日ちをて必尋ねさせの
十一番　右　林賢
おとけめ人の数と作るを列ふ身をたしとるの
右　隆縁

さるあるをれあるの志けをて思るのをくるを常をいそ法を
右右面目遍議宮九日知和歌之類者歌
十二番　右　参河
人をを氏神をを志りる数のを身をたる面をたるハ事を祈と
右
をを志をを志ををのをおけハ衣河神のをくるをせめ日をを
右をを代身をを志を面を神をを志りるとををてハあやをく
神をを人ハ対面のをるを道ををくを大内神のをくるを
をるをめをを代ををいるをゆをてハ又ををやをを

たのそてはらゝ末あるもゝ山へく思ひをん
らを通てあをを守て情をけ彼よむひてんを通
ゝとおゝふ老乃ゝゝいゝゝゝまゝゝていを
まゝ化ゝゝ宮めゝくゝを作るやむゝ清陽芸
に芸ゝゝにゝる程題をゝゝてみゝゝ神る
ゝ多人ゝゝやゝゝゝんゝゝゝゝ物ゝ
和ゝ迷ゝゝ

右衛門督家歌合 久安五年六月十八日 於中御門亭合之

題

秋月 九月盡

歌人

左

右衛門督家成

権中納言忠雅

左京大夫敦頼

左馬頭隆季朝臣

少将家明朝臣

前兵衛佐 敦仲伯女

摂津守重家

治部少輔経輔

散位敦方 義人変

散位隆長 清輔卿名